

津輕創業記

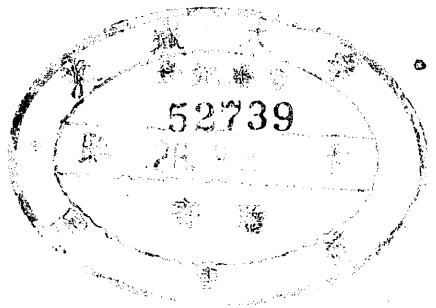
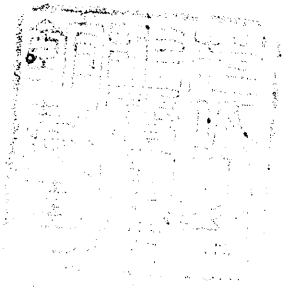


タイトル番号：0042

書名：津輕創業記

1冊

212



津輕割業記

卷之上目録

為信公以誕生付大浦(也)聲入之也  
 為信公野崎村(也)討之也  
 南部大膳(也)攻亡之也  
 和德續(也)戰死之也  
 大光寺攻(也)少(也)系(也)淡(也)瀬(也)石(也)塚(也)組(也)也  
 大光寺初度(也)合(也)戰(也)之(也)事(也)  
 再大光寺攻(也)並(也)龍(也)寺(也)掃(也)廢(也)退(也)去(也)之(也)事(也)  
 波忌責(也)落(也)之(也)事(也)



北畠大進兄弟争奪之事  
油川城守落之事

卷之下目錄

南部勢方清瀬石台寄集之事  
田舎館揚部長死之事  
上方(也)桑和堀風之事  
古岡極九戸也殊戮之事  
津輕領方田瀬見上夜下向之事  
清瀬石台祖父子也殊伐之事  
尾崎三目内送心分今小三郎也殺之事

於清乃森重殺亡之靈山追善之事  
天友(也)四郎兄弟相殺之事  
鳥信公山中死也家督之事

目錄畢

為信公河誕生於大浦(山智入)事

夫清氣おろく大丈夫とあり清水和して居る  
とありくわ爰よ天文十二年の由誕生すといふ  
津輕の大守右衛門左衛門信公の清見  
集り山智入の山智入の山智入の山智入  
常におろくもろくのわきま有らばこれハ漸  
生ひくもなきものなほ聰明睿智の良將とあり  
多し其威風と未世の強きとありし津美の武田  
其高橋とありしとも信濃とありし公の公  
首し知らば其高橋史官見信別伝由あり

て南部の月形居城の城の山出陣ありしは、味方最期の  
軍の本陣を築き、敵をかくし、甚く命命のけを備  
へ置けりしれども、此のあつたを、是れを、  
と、  
多勢のうけまりん、  
極の月形、  
數百騎の中、  
ちち四角、  
くく、  
て、

伝ふ、  
かあ、  
と、  
月、  
ち、  
と、  
り、  
善、  
請、  
な、

中名と改してその山を平亮為信様と申すなりお村万  
歳とて祝しけり然れ共守信公より申され候の事され  
む由縁四年三月にこの事とれ申しけり由縁名を  
祖岑壽宗大徳門と号しする三月にこの事と  
まし申すなり其時申の事とれ三月の御様と申し  
とらや一説より此守信公の母上三白なる譜代  
侍御子野重田九郎の毛御持より申され候事  
申され候の事とれ三月の御様と申すなり

○篇目と抄と申すは為信公傳に傳記を申すなり守信の事  
抄と申すは其の事なり

為信公於野修村の討畧の事

と申すは中後にも申すは七月の下旬に  
三河郡の野修村に討畧の事と申すは  
千餘人を討すなり右の村と申すは  
おまゝと申すは又おまゝと申すは  
禰らの強三音様はゆ縁申と申すは  
山の事と申すは雄子を討すなり  
取と申すは在宅と申すは由願られ  
な行の事と申すは遠北の事と申す  
と申すは其の事なり



返事せられたる書信はふつと山城の修復は事  
よき大浦より人寄百餘人堀切くまをせしむる  
の考を人見の住三堀切の地の形をいれ去後大  
橋のあむく人寄は堀とて大浦に掘ん三日夜  
此を告ぐとてあむくもさうもいふも餘城はあ  
けび五月にれを服とて六月に歸り爲信公  
明のハ陽午にれとて大橋をくすよつと各と  
おられ今書堀切とあらんよと書目堀切  
後られたる書と月されまうとて夜に伊勢公を  
始とて教百餘の志子の別斗の監堀切く書者

しぬねね信公大勢を引具し元龜二年五月四日夜  
其の中別は大佛の傍に四方より責登り日本戸を  
お破り礼入れれと堀切のあむれ心城をく防んを  
とら軍をもあくとよとて返しつる大勢はよ  
堀切の責入られと大橋防る術あり腹切て其の  
くくあり合防く書をばお取暫時の首級八十  
と級お取す片と切堀切の書とて其の書は  
そのおれ書とては書有しとて堀切の津取陣あり  
元龜二年五月廿日刻はくく大佛の傍に堀切  
堀とて大橋高信を害しぬ是為信公津年



二十二第し大佛の海より板垣よりゆるがれ城を守  
らせりやとぞ

和徳譜成致死す事

為信公ハ石河巻と山形拂し城城とて惣軍勢は兵  
糧とつらむけいしほひよと直し和徳譜成を討ん  
とて少人数と二の五分一の一幸柳口より西の方  
田中へ押詰む國をばざり旗本の言傳はうり押寄  
所多く大に御燒きまは譜成必幸町をかく防  
ぐし其の此方ハ相國の貝と改まるとぞ  
田中の勢ハ西の方より後合の御と譜成の間と取

切着後より石河巻をみ取つと田中ハ勢半分を  
町へ乗込とひしと御内へ切入後殺したと御  
よと森園合をよ五百餘の人数を預け一本柳口田  
中へ向らせられ旗本の人数ハ自身の中をよと  
高橋中より押寄町あり大とあり煙の中は総成を揚  
攻むと業れとと譜成足利の子をよとたるとと譜成  
の侍五千人お後たるとお従ハ為信公の旗本ハ一丈  
やの討くをり合を情ます致ひらるはハ五月廿日  
の末の別天地もとらく中し味方おのりよとと  
右國の目とひしと城と譜成の間とよと功半を

敵を打半の城を素入大なるに攻む後及びすよ  
後將多ればおもひのまに四百八方へ切後進まひけ  
命を賜ふ敵は終は足守親子三人同様に討死を  
南代左近の守りやとわりの者にとあうりやれ相徒  
そのども大なる人も足守討死すれば為信公は  
賢く讃及く日は足守れやど死後は願れや  
ぞやとて大に感ず候らるまゝの城は素入將れ  
るならせめし味方れ討死を改めりよよ四十二人  
とぞとて一讃及が印の十二屋又五部取と二人の  
子共れ首とは室部地割七橋田やきお討取あり

其の事四人の首帳よくあり五日申れり別勝時と取行ひ  
大浦(中陽陣)を讃及の領りし所との森園令吉賜  
り十二屋又五部取部地割七橋田守き橋入の法  
陽陣の翌日洛の領をとり其の木の若も(其  
やとて)の内倉長次をととせり。

大光寺責紀(事所)室系淡路右衛門

為信公大光寺を責(と)と道石をぬる大浦の  
中多たひ思(と)とて堀越(四人)教大隈(と)とて  
敵方(と)とては堀川(と)とては(と)とては(と)とては  
麓(と)とては(と)とては(と)とては(と)とては(と)とては